

## なぜラーニングコモンズを利用しないのか

青山 健太

大学全入時代を迎えつつある今、中央教育審議会の答申、そして学生の意識の変化に伴い、大学教育は学生に基礎的な読解力や文章表現力を習得させ、学生自らが主体的・能動的に学ぶように促すことが必要とされつつある。大学図書館もまた、情報通信技術の進展などを背景に、その在り方を変え、大学教育の変化に対応した施設・設備を備えなくてはならなくなった。このような情勢の中、近年、国内の大学図書館でラーニングコモンズと呼ばれる設備の設置が相次いでいる。

日本ではラーニングコモンズの設置数の爆発的な増加に伴い、これまで様々な実践報告や実態調査などが行われてきた。しかし、利用者に焦点を当てた研究はみられるものの、ラーニングコモンズを利用していない、いわゆる「非利用者」に関する研究は行われていない。

そこで本研究は、ラーニングコモンズの非利用者に着目し、ラーニングコモンズ非利用者が何故ラーニングコモンズを利用しないのかを調査し、利用者と非利用者を対比することで、ラーニングコモンズを利用しない要因を明らかにすることを目的とする。

調査手法として、質問紙調査とインタビュー調査を採用した。調査対象者は、筑波大学の知識情報・図書館学類生である。まず、質問紙調査を実施し、質問紙だけでは明瞭ならなかった点について、インタビューで詳細に尋ねることによって相互補完的な分析を試みた。質問紙調査の実施時期は2013年6月と8月と10月で、合わせて369名から回答が得られた。インタビュー調査は、2013年11月～12月にかけて、8名の学群生を対象として行った。

調査により、筑波大学春日ラーニングコモンズ(KLC)の学生の利用実態が明らかになった。その結果として、1) オフィスアワーが機能していないこと、2) チューターに対して心理的な敷居、またはガラス張りや全学計算機から近いことなど、質問し難い外的な要因が存在すること、3) 学生にラーニングコモンズの設備や利用方法が周知されていないこと、4) ラーニングコモンズ自体に問題があることが分かった。考察の中で、これらへの対応について詳しく言及している。

今後の課題としては、他大学との状況との比較・研究、実際に非利用者の利用を促進するための方策を検討し、サービスを実施、有効性を証明することなどが考えられる。

(指導教員 逸村裕)